

アジアの若手研究者が語る

SOKENDAIとそのネットワーク

村上朝子

ジャーナリスト

2006年1月に開催された総研大・国際シンポジウム「アジア地域における学術文化交流ネットワーク」は、アジアでの学術文化ネットワークをめざす初の会合であった。これに参加した海外の総研大修了生に、総研大での生活と、当時の勉強が現在の研究や仕事にどう活かされているのか、また、アジアでのネットワークのあり方について話を聞いた。

勉強に没頭の毎日

総研大での研究生生活については、インタビューしたほぼ全員が「毎日勉強ばかりでとてもたいへんでした」と振り返った。一方、教授の指導に対する評価は高く、実験施設や機器などの環境も整えられており、思う存分勉強ができた満足する声が多かった。

Zhenlin Liu (劉振林)さんは、構造分子科学専攻。96年～99年、岡崎の分子科学研究所で過ごした。学位取得後、東北大で研究をし、2001年に米国ミシガン州にあるイムラアメリカに就職。現在は研究員として超高速ファイバーレーザーの研究をしているという。

劉さんは、「日本で受けた教育は、直接指導教官と議論ができ、助手の人たちもいろいろ手伝ってくれたので、とても勉強になりました」と話す。

「いつも成果を聞かれプレッシャーを感じていました」と語るのは、Jeon Eun-Ju (全恩珠)さん。素粒子原子核専攻で、2000年～2003年、つくばの素粒子原子核研究所に在籍した。現在はソウル国立大学で博士研究員として、日本で研究していたニュートリノの実験にかかわっている。

核融合科学専攻のYao Zhenyu (姚振宇)さんも「いつもプレッシャーを受けていました」と話す。また、「実験機器が豊富でいつでも自由に使えるのがとてもよ

Zhenlin Liu

劉振林

現職：イムラアメリカ (米国)
シニア技術研究員
超高速ファイバーレーザーの研究
専攻と研究テーマ：構造分子科学専攻



Jeon Eun-Ju

全恩珠

現職：ソウル国立大学 (韓国) 博士研究員
ニュートリノ実験
専攻と研究テーマ：素粒子原子核専攻 ニュートリノ実験

かった」と述べ、勉強する環境が整っていた点を高く評価する。ただ、「総研大ではクラスメートが少なく、他の大学のようにキャンパスライフがないのが残念でした」とも。2005年に学位を取得し、現在は博士研究員として核融合科学研究所の炉工学研究センターに在籍。4月からは東京大学で研究を続けることになっており、中国へ戻るのは、早くて2年後だという。「日本では最先端の研究ができるのがいい」と、今後の研究に意欲をみせる。

一方、日本にある最先端の機器が自国にないため、帰国してから苦労したと話す人もいる。ベトナム出身のKhanh

Yao Zhenyu

姚振宇

現職：核融合科学研究所
炉工学研究センター 博士研究員
専攻と研究テーマ：
核融合科学専攻 核融合システム



アジアの学術文化ネットワークへの第一歩に

小平桂一

総合研究大学院大学学長

このシンポジウム企画の発端は、本大学設立 15 周年記念事業として学位取得者のネットワークづくりを始めたことにあります。国内の修了生に続き、外国籍の修了生の把握を始めました。過去 13 年間に 1061 名の学位取得者を送り出しており、うち 143 人が外国人です。修了生の把握はかなりのたいへんな作業でしたが、彼らが日本や母国などで活躍していることがわかりました。私自身、ドイツの国費留学生でしたが、今でもその大学からレターがきますし、大学再訪問プログラムというのがあります。総研大は国際的人材の養成を看板にしているので、アフターケアも充実させたいと考えています。

アジアに焦点をあてた理由のひとつは、欧米の若手研究者に対してはサマープログラムがあるからです。毎年夏に、米国、カナダ、イギリス、ドイツ、フランスの 5 カ国から 100 人ほどの大学院生やポスドクの研究者に 2 カ月間、日本の研究文化体験をしてもらうというもので、とても人気があります。この事業は、戦後日本が受け

た恩恵の恩返しという趣旨もあって始めました。今日、世界的な視点でみると、今の途上国の学生さんを育て、そのアフターケアすることが求められているのではないかと思います。

また、アジア諸国は現在急速に発展しています。以前は、米、欧、日とよくいわれましたが、今はそういう時代ではありません。欧州連合、米州連合と同じように、亜州 (アジア) 連合を組むべきだと思います。私の専門の天文学だけでなく、他の分野でもアジア地域の連携が進んでいます。総研大の留学生が基盤機関や研究所で展開する国際共同研究が、アジアの連帯の重要な要素を占めてきています。

ただ、米州、欧州連合に比べ、アジアでは、歴史認識について差があります。戦争というのは非人間的なもので、日本は被害者であると同時に、加害者でもあります。また、日本の学校教育では、アジアの国に対し侮蔑的な見方を教えてきました。亜州連合を作っていくとすれば、これを払拭しないといけません。これからはアジアの国と尊敬しあえる関係になりたいと思って

います。

総研大は共同機関の枠組みで東アジア連合を作っていくことを期待しています。アジアは学術には秀でていても、米や欧のように、友だちとしての関係性がありません。草の根の交流が続き、10 年、20 年たてば、自然にネットワークができてくると思います。里帰りプログラムも行いたい。修了生が 10 年たったら戻ってきて交流するというのもいいかもしれません。このシンポジウムは出会いの第一歩です。ここで課題を整理して、踏み台をまとめられればいいと考えています。





Jiang Biwei

姜碧滄

現職：北京師範大学（中国）助教授
専攻と研究テーマ：天文科学専攻 電波天文学

Lam（ハーン・ラム）さんは生理科学専攻。96年～99年、岡崎の生理学研究所で学び、学位を取得。現在はハノイの主要な病院であるトラン・ハン・ダオ病院のバイオメディカル部門で働いているが、日本で使用していた画像分析装置がベトナムにはなかったため、苦勞したという。「ただ、方法論はわかっていたので、なんとか工夫しました。日本でコンピューターの技術も学ぶことができたので、非常に役立っています」と話す。

た。現在は北京師範大学の助教授を務める。

「日本で勉強したおかげで、中国で学んできた人に比べて昇進も早いです。日本での経験がとても活かしています」と話す。また、日本では英語で通していたため、それが今の仕事に役立っているともいう。「勉強はすべて英語だったので、英語が上達しました。現在、自分の専門に

総研大で学んだことは世界トップレベル

総研大での勉強が現在の研究や仕事に役立っているというのは、修了生の共通した意見だ。劉振林さんは、合計8年間も日本にいたので、米国で自分を試したいと思い、イムラアメリカに就職したが、米国の大学で学んだ同僚とも互角に渡り合えると話す。「米国のスタンフォード大学やMIT出身の人もいますが、私が彼らにひけをとるとは思いません。日本で学んだことは世界のトップレベルだと実感しました。私は2年でシニアエンジニアに昇進しました」

Jiang Biwei（姜碧滄）さんは、天文科学専攻。94年～97年、国立天文台野辺山宇宙電波観測所で電波天文学の勉強をし

加え、英語も学生に教えています」

姜さんが中国へ戻ったのは、日本ではいい仕事を見つけるのがむずかしかったからだという。「日本では、たとえ仕事が見つかったとしても、いいポジションを得るのはむずかしいですが、中国ではいいポジションが得られますし、私も自信を持って働くことができます」

日本への留学の問題点については、日本では紹介やコネが重視され、いい面もあるが、つてがないとむずかしいと指摘。それに対して米国は、英語の試験があり書類の手続きは煩雑だが、多くの大学で奨学金の制度が充実しており、留学できるチャンスが多いと話す。

「米国に留学した同級生は、中国に帰ってきていません。日本で勉強した人は中国に戻るのに、その意味では中国のためになっていると思います」

日本語ができることも大切

専門が何であろうと科学の世界において英語は共通の言語だ。しかし、日本にいるのだから少しでも日本語がわかったほうがいいと、外国人修了生の多くが指摘した。

Tai RenZhong（邵仁忠）さんは、研究室の中であっても、日本語ができると周



Khanh Lam

ハーン・ラム

現職：トラン・ハン・ダオ病院（ベトナム）
バイオメディカルモデリング
専攻と研究テーマ：生理科学専攻 統合生理学

りとのコミュニケーションがよくなると話す。「日本語でちょっとした世間話ができるようになると、周りの人とぐっと親しくなれます」と流暢な日本語で答えた。放射光科学専攻で、96年～99年、つくばで勉強をした。学位取得後、東京学芸大、日本原子力研究所関西研究所の光量子研究センターで研究を続け、2004年から中国科学院上海応用物理学研究所の教授として、2009年完成予定の上海シンクロトン放射施設（SSRF）の建設に携わっている。

ブルガリア出身のRadostin Danev（ラドスティン・ダネブ）さんも、日本語の大切さを指摘する。生理科学専攻で、岡崎の生理学研究所に98年～01年在籍し、学位取得後の現在も岡崎で研究を続けている。日本語習得の重要性を認識し、2年前から日本語を学び始めたという。「日本語が少しできるだけでも、周りの人とのコミュニケーションがずっとよくなります」

一方、「勉強が忙しすぎて日本語を勉強する時間がありませんでした」と苦笑いするのは、Chaoyuan Zhu（朱超原）さん。機能分子科学専攻で90年～93年、岡崎の分子科学研究所で学んだ。学位取得後、米国のミネソタ大学に行き、2005年に台湾に戻った。現在は台湾国立交通大学の助教授を務める。

「研究所では問題ないのですが、一步研究所の外にでると、日本語が理解できないので、とても孤独感を味わいました」

そのような体験から朱さんが提案するのは、①日本語がわからない留学生に対し、3カ月から半年、日本語を学ぶ期間を設ける、②日本人の家庭にホームステイできるプログラムを導入する、③日本語のテストを課す、などだ。

修了生のネットワークについて

今回のシンポジウムについて評価する声は多かったが、研究者として通常参加する学術研究のシンポジウムとは主旨が異なるため、自分の役割を事前によく理解できず、どのような発表をしたらいい

Tai RenZhong

邵仁忠

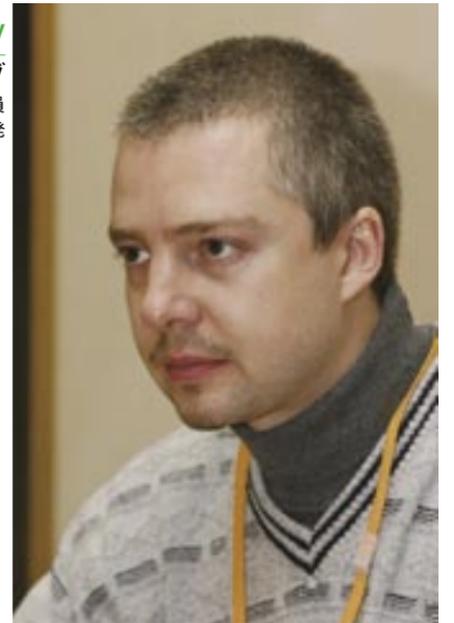
現職：上海応用物理学研究所（中国）教授
上海シンクロトン放射施設（SSRF）の建設
専攻と研究テーマ：放射光科学専攻



Radostin Danev

ラドスティン・ダネブ

現職：生理学研究所 研究員
専攻と研究テーマ：生理科学専攻 電子顕微鏡の開発



のか戸惑った人もいた。一方、総研大修了生のネットワークを作るという考えには皆、賛意を表明した。

「ここで勉強していたときは、クラスメートと話す機会がほとんどなかったので、このようなシンポジウムは、いろんな人に会えるのでいい」と話すのは、姚振宇さん。

邵仁忠さんは、このシンポジウムに参加して初めて自国の科学者が総研大修了

生だと知ったという。「彼は私より5年前に修了していたので、わかりませんでした。専門もかなり近いのに気づきませんでした。総研大修了生と知ってお互いびっくりしました」

姜碧滄さんは、今回の来日を利用して、自分が勉強生活を送った野辺山の宇宙電波観測所にも足を運び、講演を2つもこなした。「総研大を修了して9年たち、あまり連絡もとっていなかったの、この

総研大・国際シンポジウム「アジア地域における学術文化交流ネットワーク」

平成 17 年度の総研大国際シンポジウム「アジア地域における学術文化交流ネットワーク～多様な文化と分野との出会い～」は、2006 年 1 月 20 日から 23 日までの 4 日間、総合研究大学院大学葉山キャンパスで開催された。主にアジア地域からの総研大修了生や、総研大の基盤である共同研究機関の教員、学生など約 140 人が参加し、多様な専門分野からの発表とともに、アジア地域のネットワーク構築に向けて活発な議論を展開した。第 1 日目の夜のレセプションで参加者が顔を合わせた後、2 日目から実質的な議論が行われた。五つのセッションの後、最後にパネルディスカッションが開かれ、それまでの議論を総括した。また、2 日目の夜にポスターセッションも設けられた。

第 1 セッションは「アジア地域における学術文化交流ネットワークの事例」として、総研大の各研究機関で行われているアジア地域での学術ネットワークについて報告があった。分野は、加速器科学、遺伝学、情報学、核融合科学、天文科学、比較文化学、分子科学など多岐にわたった。

第 2 セッションはゲストによる特別講演。21 世紀政策研究所理事長の田中直毅氏、台湾中央研究院総裁の李遠哲氏（1986 年のノーベル化学賞受賞者）、人間文化研究機構・機構長の石井米雄氏が、アジアについて高い視点で講演を行った。李総裁は、「ひとつのコミュニティ われわれの未来」と題して、人類が直面している二つの大きな課題—人口問題と国家間や各社会の中の格差の問題—を指摘し、この課題を克服するためには、お互いのよりよいコミュニケーションと、おのおのの違いを認め合う知性が必要だとし、科学者の果たすべき役割を説いた。

3 日目の第 3 セッションでは、総研大修了生 11 人が、日本で受けた教育や、その

後の自分の研究について発表を行った。

第 4 セッションでは、アジア地域が協力して取り組むべき課題として環境問題を取りあげ、4 人の専門家が話題を提供した。その夜の分科会では、修了生・留学生のネットワークなどについて意見交換が行われた。

最終日午前中の第 5 セッションでは、「ネットワークの体制構築に向けて」、各分野から発表を行った。

そして最後のパネルディスカッションでは、総研大の今後の取り組みについて、小平学長司会のもと活発な議論が展開された。まず、総研大副学長の高畑尚之氏が前日の夜に行った留学生とのミーティングの報告を行い、続いて国際日本文化研究センターの劉建輝氏が、自身の留学体験と、その後中国と日本で教えてきた経験をふまえ、▽留学生が日本社会に充分入ることができるような受け入れ態勢、▽留学経験者が主体になる横断的なネットワークの創設—などの提案をした。

その後、総研大が実施している海外レクチャーやアジア冬の学校などの紹介と

もに、研究機関が行っているアジアでの連携事業についても紹介があった。会場からの意見や具体的な提案もあり、今後のネットワークづくりにおいて検討すべき課題が明らかにされた。

台湾中央研究院の李総裁は全講演を聴いた後、アジア地区の学生や若手研究者の学術交流や広い意味での教育において総研大が果たせるであろう役割や期待を述べ、それが 4 日間に及ぶシンポジウムの総括となった。

本シンポジウムの実施委員長である池村淑道教授は、「総研大の各基盤機関は日本の基礎学術のセンターとしてアジアでのネットワークを持っていますが、これを学問分野の枠を超えたアジアの学術ネットワークとして発展させることが重要です。それには総研大の教員・修了生・在学生のネットワークを大いに活用できると思います。これは他の大学や機関では難しいことで、総研大の意義につながるものです。このシンポジウムはそのための第一歩として意義のあるものでした」と語った。



台湾の李遠哲氏



Chaoyuan Zhu

朱超原

現職：台湾国立交通大学（台湾）助教授
専攻と研究テーマ：機能分子科学専攻 理論化学物理

シンポジウムの話があったとき、参加しようかどうか迷いました。でも、こういう機会があってよかったと思います。ここに戻っている人々に会えるのはいいことです」

一方、全恩珠さんは、「普通の学術的なシンポジウムと違うので、どういうスライドを用意していったらいいのか迷いました」と打ち明ける。また、ハーン・ラムさんのように、「せっかく日本に来るのだから、研究についてもっと学ぶ場があればよかった」と話す人もいた。

総研大の名前は日本国内でもあまり知られていないので、ネットワークを強化することで、より多くの人々が名前を知ることになるのではないかという声も多く聞かれた。「総研大は、PhD取得のモデル校です。もっと多くの人に知ってもらうことはとても大切だと思います」と全恩珠さん。

米国で仕事をしている劉振林さんも同意見だ。「総研大の名前はあまり知られていないので、このようにネットワークを作るのはいいことだと思います。それに、ここの修了生はいろんな分野で活躍しているので、とても興味深い」

がかかります。総研大の修了生は多分野の最先端で活躍している人が多いので、彼らの研究論文など、インターネットですぐ入手できるようになればいいかもしれません」

邵仁忠さんも、「少なくとも、電子メールアドレスのリストを共有したい」と希望する。

アジア地域、特に日本と中国や韓国との連携について、示唆に富む意見を述べたのは、Jian Nan Cao（曹建南）さんだ。地域文化化学専攻で、大阪の国立民族学博物館で91年から96年まで学んだ。現在は、上海師範大学社会科学部の副教授として、日本語や日本文化などを教えている。ここ8年間、駒沢大学の教授と共同で漢民族のシャーマニズムについての研究を行っているが、中国の人は日本の研究者が中国について調べていることに不信感を持っているという。

「中国人は、日本人がお金をかけて中国のことを調べるのは、それが侵略のためなのではないかと考えるのです。このような誤解を解くためにも、われわれの学術研究のことをもっと知ってもらう必要があると思います。これはどの分野についてもいえるのではないですか」

Jian Nan Cao

曹建南

現職：上海師範大学（中国）社会科学部副教授
専攻と研究テーマ：地域文化化学専攻

